

【研究ノート】

蘇軾の詞と『莊子』

～特に「肌膚若冰雪」の表現を中心として～

SuShi's Ci Poetry and Zhuangzi

～ Focusing on the Expression of “Skin looks like ice or snow” ～

保 莉 佳 昭

HOKARI Yoshiaki

一 はじめに

中国北宋時代を代表する政治家・文人である蘇軾（そ・しょく／1036～1101年）は、「詞」という文学ジャンルに新たな題材・テーマを積極的に取り入れ、新境地を切り開いた。その中でも、自身の人生観を詠んだことは、従来の詞には見られない点であり、特に彼の考え方が春秋戦国時代（紀元前770～同222年）の思想書『莊子』と密接に関係することは従来から注目が集まり¹⁾、既に先行研究がある²⁾。蘇軾の『莊子』についての発言は、弟の蘇轍（そ・てつ／1039～1112年）が書いた墓誌銘に見える。

少与轍皆師先君。初好賈誼，陸贄書，論古今治乱，不為空言。既而讀莊子，喟然嘆息曰，吾昔有見于中，口未能言，今見莊子，得吾心矣。

【大意】

（兄の蘇軾は）若い時より私と一緒に亡き父を師と仰いだ。（学問においては）初め、古今の興亡を論じて、空言が無い賈誼や陸贄の書を愛読した。しかし『莊子』を読んでもみると、「自分がむかし心に浮かんだものの、言葉として口に出して言えなかったことが、いま『莊子』に見え、我が心をつかんで離さない」とため息交じりに言った³⁾。

この記述から、蘇軾の『莊子』に対する熱い思いが伝わって来よう⁴⁾。『莊子』は、人為を否定し、あるがままの無為自然を重んじた。そして、「斉物思想」を唱え、現実の全ての区別・差別的観念を否定し、生死・貴賤・大小から是非・善悪の対立まで齊一に捉えた。蘇軾は既成の価値観を打破しようとしたが、その姿勢は『莊子』の思想と重なる所が非常に多い。彼は『莊子』を踏まえながら、人生における己の生き方・姿勢・態度を詞に詠んだと言っている。ただ『莊子』には「斉物思想」以外に、多くの寓話・逸話も載っており、蘇軾は人生観以外に、これらの挿話を取り入れて詞を作っている。しかしながら、先行研

究は『莊子』の人生観を踏まえた詞に集中しており、『莊子』の挿話を踏まえた詞は、従来なかなか目を向けられることが無かった。そこで、小稿では、これら今まであまり目を向けられることが無かった作品の中から、特に『莊子』の「肌膚若冰雪（肌は冰雪のようだ）」という表現を踏まえ、女性の美しさを詠んだ詞を取り上げ、その内容を確認し、特徴をまとめてみる。なおテキストは原則として『蘇軾全集校注』（河北人民出版社、2010年）を用い、引用した作品には適宜、番号、大意を付けた。また、作品が前後二段の構成になっている場合は行空けをして分けた。なお、蘇軾の生涯の事績については基本的に『蘇軾年譜』（中華書局、1998年）に拠った。

二 「肌膚若冰雪」の表現「その一」

熙寧七年（1074年）九月、当時杭州（浙江省）副知事を務めていた蘇軾に、密州（山東省諸城）知事への転勤命令が下った。それを受けて、彼はすぐに杭州を離れ、密州に向かい、その道中、潤州（江蘇省鎮江）に立ち寄った。そこで、潤州知事の許遵（きよ・じゅん／生卒年不詳）に会い、酒宴の席で「減字木蘭花」という詞を作った⁵⁾。

①減字木蘭花

鄭莊好客	あなたは鄭当時のように客を好み
容我尊前先墮幘	私が酒席で酔って頭巾を落としたことも許してくれた
落筆生風	あなたが筆を執って字を書き出せば、風が起こる
籍籍声名不負公	（その姿は）知れ渡った名声に違わぬ素晴らしさ
高山白早	私の頭髮は既に高い雪山のように白いけれども
瑩骨氷膚那解老	（妓女たちの）玉の骨と氷の肌は老いることはない
從此南徐	これから潤州は
良夜清風月滿湖	美しい夜に清らかな風が吹き、月明かりが湖に満ちることでしょう

本詞には「贈潤州許仲塗，且以鄭容落籍高瑩從良為句首」という序が付けられている。その意味は、潤州知事の許遵（仲塗は字）に贈り、合わせて「鄭容落籍高瑩從良」の八文字を各句の一字目に用いて詞を作った、ということで、確かに、「鄭容落籍高瑩從良」の字がそれぞれ句頭に置かれている。この八文字の中の「鄭容」と「高瑩」は、潤州の官妓（役所に所属する歌妓）の名で、最後の「從良」は「落籍」と同じ意味を表し、八文字合わせると「鄭容と高瑩の二人を、官妓の縛りを解いて自由の身にしてほしい」ということになる。この詞の作成経緯については、陳善（ちん・ぜん／？～1169年）の『捫蝨新話』に次のような記載がある。

坡昔寓京口，官妓鄭容，高瑩二人侍宴，坡喜之。二妓間請於坡，欲為脫籍。坡許之而終不為言。及別二妓之船所，懇之，坡曰，爾但持我此詞以往，太守一見，便知其意。

【大意】

蘇軾は潤州に立ち寄った時、酒宴で官妓の「鄭容」と「高瑩」の二人に会い、いたく気に入った。彼女たち二人は、代わる代わる蘇軾に「自分たちは歌妓をやめたい」と願い出た。蘇軾は承知したが、結局、(潤州知事の許遵には) 言わないでいた。蘇軾が船で旅立つ別れの際に、彼女たちが懇願すると、蘇軾は「きみたち、私のこの詞を持って(知事様に見せに) 行け。知事様は一目見て、すぐその意味が分かるから」と言った⁶⁾。

これに拠れば、本詞は蘇軾が「鄭容」と「高瑩」の落籍の願いを許遵に伝えるために作られたものであり、彼女たち二人が官妓であったため、落籍には、役所の長官である潤州知事の許遵の許可が必要であったことが分かる。以下、作品の内容を詳しく見ていくことにしよう。

まず詞の前半は、許遵の人柄・文才を褒め称えている。「鄭當時」とは、前漢時代の人で、任侠を自負し、賓客をもてなすのに一昼夜酒席を続け、常に接待が不十分ではないかと心配したという⁷⁾。ここでは、許遵を「鄭當時」に喩え、彼が自分に、心のこもった、周到なもてなしをしてくれたことに対する感謝の気持ちを表している。それに続いて、許遵の心の広さを称える。「酔って頭巾を落とす」とは、酒席での礼を失する行為とされた。「あなたは私の非礼な行為も許してくれた」というのは、許遵の寛大さを言った言葉である。そして、第三句、四句は、許遵を唐の大詩人である李白に喩え、その文才を「評判通りのすばらしさ」と褒める。李白は「詩文を書けば、その速さは風や雨を驚かせ、詩が出来上がれば、鬼神をも感動して泣かせる」と称賛された⁸⁾。蘇軾はこの表現を使い、「あなたの文才は、まるで李白のようです」といい、許遵の文才を褒めている。ここでこのように、最高の賛辞を許遵に贈ったのは、もちろん心のこもったもてなしを受けたからではあるが、同時に、本詞が「鄭容」と「高瑩」との落籍を許遵に許してもらうために作られたものであり、言葉は悪いが、ここで彼のご機嫌取りをしているからでもある。

詞の後半は、まず、「鄭容」と「高瑩」の美しさを不老不死の仙女に見立てて称える。「自分は既に白髪頭になったけれども、彼女二人の玉で出来た骨と氷で出来た肌は老いることはない」と言う。そして詞の最後の二句は、「鄭容」と「高瑩」が潤州を去った後のことを想像して詠う⁹⁾。「美しい夜に清らかな風が吹き、月明かりが湖に満ちる」という風景は、静かで平穏な美景であるが、なぜ、彼女たちが去った後のことを、蘇軾はこのように詠んだのか。この点については、後で考えてみることにする。

さて、ここで、「鄭容」と「高瑩」の美しさを表現している「氷膚」の語に注目してみたい。この語は、次の『莊子』「逍遙遊」篇に見える挿話を踏まえている。

藐姑射之山，有神人居焉。肌膚若冰雪，淖約若処土。不食五穀，吸風飲露，乘雲氣，御飛龍，而遊乎四海之外。其神凝，使物不疵癘而年穀熟。

【大意】

はるか遠くの姑射^{こや}という山に、神人が住んでいる。肌は雪や氷のようで、処女のようにたおやかである。五穀を食べず、風を吸い、露を飲み、雲や霞に乗り、飛竜に引かせ、天下の外に遊ぶ。その精神が凝集すると、万物は傷つくことなく、穀物はよく実るようになる。

この『莊子』の話は、読んで分かる通り、仙女に関するものである。彼女は美女であり、処女のように穢れの無い美しさを湛えている。「肌は雪や氷のよう」とは、純白な色を表すと同時に、人間とは異なる、冷たい透き通った神秘性をも表現している。蘇軾は、この『莊子』にある仙女の「肌は雪や氷のよう」という表現から「氷膚」という二文字の語を作り、鄭容、高瑩の美しさを表現した。なお、「雪」を選ばずに「氷」を選んだのは、透明感を重視したからであり、透き通っていれば「骨」まで透けて見える。そこで、「高瑩」の「瑩」が美しい宝石の玉^{ぎよく}を意味することから、「瑩骨（美しい玉で出来た骨）」という語を作り、「氷膚」と合わせ「瑩骨氷膚」の四字にして、二人の美しさを称えたのである¹⁰。ただ蘇軾がここで『莊子』の挿話を使って二人を仙女に見立てたのは、単に美しさを称えるためだけではない。筆者はこの時の鄭容と高瑩との願いとも結び付けて表現していると考える。繰り返すが、彼女たちは妓女の世界から抜け出したがっていた。蘇軾はその願望を「実は鄭容と高瑩は氷の肌と玉の骨を持った仙女なのです。ですから仙界で暮らすのが最もふさわしいです。彼女たちは、今いる世界から抜け出し仙界に戻りたがっています。どうかこの願いを叶えてやって下さい」という言い方で許遵に頼んだに違いない。そして最後の二句の表現も、やはり仙女と関係がある。「美しい夜に清らかな風が吹き、月明かりが湖に満ちる」という風景は、彼女たちが潤州を離れた後のことを想像して描いているが、なぜ蘇軾は彼女たちがいなくなった後について、このような非常に美しく平穏な風景描写を用いて表現したのか。

姑射の山に住む美しい仙女は「精神が凝集すると、万物は傷つくことなく、穀物はよく実るようになる」という。仙人世界は浄土であるから、わざわざ「万物は傷つくことなく、穀物はよく実るように」する必要はない。それでは、仙女がこの力をどこで発揮するのかといえば、人間世界以外無いであろう。つまり、仙女は人間世界を平穏で豊かにする力を持っているのである。少し回り道をしたが、本詞最後の部分は、蘇軾が「もし仙女の鄭容と高瑩の願いを叶えてくれたならば、彼女たちがお礼として潤州に非常に美しく平穏な日々をもたらしてくれますよ」と許遵に語りかけていると解釈出来る。

本詞は、真剣に落籍を願っていた鄭容と高瑩には悪いが、戯れの作である。おそらく許遵は彼女たちを非常に気に入っており、手放したくはなかったのであろう。ただ彼女たちは意思が固く、自分たちの思いを蘇軾から伝えてほしいと懇願した。そこで、蘇軾は直接的な言い方で伝えても上手くはいかないと考え、ひと工夫をして、許遵が思わず微笑み「仕方がないな」と思うような作品を作り、彼女たちの願いを叶えてあげようとしたのである。

さて、①「減字木蘭花」詞が作られてから五年経った元豊二年（1079年）七月、蘇軾は朝政を誹謗した罪で逮捕される。取り調べは過酷を極め、流刑という判決が下り、翌年

の二月に彼は流刑地の黄州（湖北省黄冈）に着く。この黄州にいた間も、彼は詞を作り続けたが、元豊五年（1082年）に「洞仙歌」という詞を作っている。

②「洞仙歌」

氷肌玉骨	氷の肌と玉の骨は
自清涼無汗	清らかで冷たく、汗をかくことがない
水殿風来暗香滿	水辺の高い建物に風が吹き、仄かな香りに包まれる
繡簾開一点明月窺人	美しい簾を開けると、明るい月が射し込み人を照らす
人未寢	人はまだ眠りにつかず
欹枕釵横鬢乱	横になったまま簪は傾き鬢の毛は乱れる
起来携素手	起き上がって白い手を取り
庭戸無声	庭に佇めば、物音はせず静まり返っている
時見疏星渡河漢	時に星が一つ、天の川を渡るのを目にする
試問夜如何	「夜はどれほど更けたのか」と尋ねてみたが
夜已三更	もう真夜中になっていた
金波淡玉繩低轉	月の光はやや薄れ、玉繩星は空を巡って低く垂れている
但屈指西風幾時来	指を折って、秋風はいつになったら来るかと数えてみたが
又不道流年暗中偷換	また気付かぬうちに、流れて行く歳月は密かに移り変わる

この詞に関して、『傳幹注坡詞』¹¹⁾には次の「自序」が付けられている。

余七歳時，見眉山老尼。姓朱，忘其名，年九十歳。自言嘗随其師入蜀主孟昶宮中。一日大熱，蜀主与花蕊夫人夜納涼摩訶池上，作一詞，朱具能記之。今四十年，朱已死久矣，人無知此詞者。但記其首兩句，暇日尋味，豈「洞仙歌令」乎。乃為足之云。

【大意】

私が七歳の時、眉山（四川省）の老いた尼僧に会った。（彼女は）苗字を朱といい、その名は忘れが、年齢は九十歳であった。彼女は「自分は以前、師匠に付いて蜀の皇帝である孟昶^{もうちよう}の宮中に入った。ある非常に暑い日、蜀の皇帝と花蕊夫人^{まかち}が、摩訶池のほとりで夕涼みをして、詞を一首作った」と言い、朱はそれをつぶさに記憶していた。今、あれから四十年、朱は既に亡くなって大分経ち、あの詞を知っている人はいなくなった。（いま私は）その初めの二句を覚えているだけだったが、休みの日によく読み味わってみると、「洞仙歌令」ではないか。そこで、これに言葉を足して言う。

これに拠れば、本詞冒頭「氷肌玉骨，自清涼無汗」の二句は、五代後蜀の皇帝であった孟昶（もう・ちよう／919～965年）が作ったものであり、それに続く部分を蘇軾が作ったことになる¹²⁾。この「氷肌玉骨」は、花蕊夫人（かずいふじん〔名字は徐氏〕／生卒不詳）の美しさを表現したもので、①「減字木蘭花」詞の「瑩骨氷膚」と重なり、『莊子』

の「肌膚若冰雪」を踏まえ、彼女の魅力を仙女の神秘的なイメージを使って称えている¹³⁾。これに続く四句は、摩訶池のほとりにある建物と花薬夫人の姿を描く。摩訶池の岸辺に建つ高殿には涼しい風が吹き、辺りには花の香りが満ち溢れる。この時、孟昶と花蕊夫人は未だ眠りにつかず、玉の暖簾を巻き上げると、月光が差し込み、艶めかしい花蕊夫人を映す。寝付けない二人は、手を携えて静かな庭に出る。空には天の川が架かり、そこに星が流れ、夜は更け行く。詞の最後は「いつになったら秋風が吹くのかと数えてみた。ただ、時は無常で、気付かぬうちに季節は変わってゆく」という思いを吐露している。本詞については、張炎（ちょう・えん／1248～1320年）がその詞論書『詞源』で「『清空』の境地の中に独特の情趣をたたえており、詞作の力量の無い者がここまで到達するのはむずかしい」と称賛している¹⁴⁾。

「氷肌玉骨、自清涼無汗」は、蘇軾のオリジナルではない。しかし、七歳の時に聞いた詞の一節を、四十年後になっても未だ忘れずにいたのは、この表現が彼の文学的感性と合致したからであり、それゆえ、以後、類似の表現を使った詞を作り出す大きなきっかけとなったと言える。

三 「肌膚若冰雪」の表現「その二」王朝雲を詠んだ詞

この後、蘇軾は②と同じ詞牌の「虞美人」という詞を作り、そこで類似の表現を使っている。

③「虞美人」

氷肌自是生来瘦	氷の肌（を持った私）は生まれながらに華奢であり
那更分飛後	まして別れの後の辛さには、とても耐えられない
日長簾幕望黄昏	昼間は長く簾を閉ざし、黄昏になって外を眺める
及至黄昏時候	黄昏時になると
転銷魂	今度は魂が消えるほどの悲しみに陥る
君還知道相思苦	もしあなたが片思いの苦しみを知っているのなら
怎忍抛奴去	どうして私をたやすく捨て去ることなど出来ましょうか
不辭迢遞過関山	（あなたに従って）遙か遠くの山々を越えて行くのも構いません
只恐別郎容易	ひらすら恐れるのは、あなたとの別れはたやすいけれど
見郎難	あなたとの再会は難しいこと

この詞は、紹聖元年（1094年）九月、定州（河北省）から惠州（広東省）に向かう旅の途中で作られたものである¹⁵⁾。冒頭に『莊子』の「肌膚若冰雪」を踏まえた「氷肌自是生来瘦」という句を置いているのは、②「虞美人」詞と同じ作法である。

この年四月、定州知事を務めていた蘇軾は、再び朝政を誹謗したことにより英州（広東省英徳）知事に左遷されることになった。彼は左遷先に向かうべく旅立ったが、その途次

の六月、処分が惠州流罪に変わった。再び罪人となった蘇軾は、行き先を変え、惠州に向かうことになったが、惠州は所謂「嶺南の地（南方の未開の地）」であり、この流刑地に向かう旅は大庾嶺を越える過酷なものであった¹⁶⁾。この旅に、蘇軾の妾である王朝雲（おう・ちょううん／1063～1096年）も同行した。彼女は熙寧七年（1074年）九月に十二歳で蘇軾の妾となり、以降ずっと仕えてきた。蘇軾は初め王弗（おう・ふつ／1039～1065年）を娶ったが死別し、次いで王閏之（おう・じゅんし／1048～1093年）と再婚したものの、彼女も前年の元祐八年（1093年）に亡くなっている。この時、蘇軾にとって、王朝雲は妻と同じ大事な存在であり、二人は固い絆で結ばれていた。とはいえ、大の男でも相当な覚悟が必要な旅に同行するとなれば、固い決意が必要である。その彼女の思いを蘇軾が代わって詠んだのが、この③「虞美人」詞である。

本詞は全て朝雲が語る形で書かれている。冒頭、「自分の肌は氷のようで、生まれながらにして華奢です。こんな私が、あなた（蘇軾）との別れに耐えられるわけがありませんか」と言う。そして「もし別れてしまったら自分はどうなるか」を訴える。「一人過ごす時間は長く感じられ、なかなか夕方にはなりません。やっと夕方になり、閉ざしていた簾を巻き上げてみると、今度は黄昏の風景に心が動かされ、辛く切なくなります」。ここで王朝雲は、朝から晩まで、別れの悲しみに苛まれ続け、とても耐えられないという心情を吐露する。これに続く後半は、旅の同行を懇願する彼女の言葉が並ぶ。「一人でいるのが、いかに辛いかが存じでしょう。まさか私を置いて行きはしませんよね」と言い、「一度別れたら再会は難しい。ならば敢えてあなたに従い険しい山を越えてみせます」と決意を述べる。王朝雲の蘇軾への愛が綿々と綴られている。

惠州流罪の処分を聞いた時、王朝雲は蘇軾に同行したいと言った。しかし、蘇軾は「過酷な旅と辛く厳しい流刑地暮らしは間違いないから、私について来てはいけない」と言ったに違いない。それに対して、彼女が言った言葉を詞に仕立てたのがこの③「虞美人」詞である。詞中の「不辭（辞さず）」という二字からは、彼女の固い決意が伝わってくる。

本詞の「氷肌」は、『莊子』の「肌膚若冰雪」を踏まえ、朝雲を仙女に見立て、日焼けしたことも無い透き通る肌と、華奢なスタイルを描く。そこからは、たくましさと真逆の華奢な女性の姿が想像される。そして、その後には別れの辛さに耐えられない女性の心情描写へと続く。仙女である彼女が、仙界の「姑射の山」に住んでいれば、「雲や霞に乗り、飛竜に引かせ、天下の外に遊ぶ」こともできただろう。しかし、いまは人間界に身を置く、か弱い一人の女性に過ぎない。その彼女が「嶺南越えも辞さず、別れるよりも、あなたに付いて行きます」と言うのだから、彼女の蘇軾への愛情の深さ、芯の強さがより強調される。華奢であれば、山越えの旅、南方の蛮夷の地での生活に耐えるのは難しく、当然ためられる。しかし、彼女は「別れ」よりも「苦難の旅と生活」を選ぶ。それは、蘇軾と一緒にいたいからである。この詞の「氷肌」は華奢な体躯につながる表現ではあるが、作品全体で見ると、むしろ精神的なたくましさと蘇軾への愛を際立たせていると言えよう。

王朝雲は、気丈にも惠州への旅に従ったが、旅の疲れと、惠州での厳しい生活のために、紹聖三年（1096年）七月、世を去る。三十四歳の若さであった。その年の十月、蘇軾は彼女を悼み「西江月」という詞を作っている。以下、それを読んでみる。

④「西江月」

玉骨那愁瘴霧	玉の骨は、南方の瘴気など恐れことはない
氷姿自有仙風	氷のように高潔な肌には、もともと仙女の風格が備わっている
海仙時遣探芳叢	海上の仙山に住む仙人が、ちょうど美しい梅林を探訪させようと (使いを) 遣わした
倒掛緑毛麼鳳	(その使いは) 枝に逆さま止まっている緑の羽根の珍鳥「倒掛子」
素面翻嫌粉澆	白い肌の素顔は、おしろいで汚されるのをいつも嫌う
洗妝不褪唇紅	化粧をおとしても、唇の紅は色褪せない
高情已逐曉雲空	気高い心を持った梅は(仙女と化し)、既に朝焼けの雲を追って いなくなってしまった
不与梨花同夢	梨の花と夢を共にしたくなくて

この詞には「梅花」という小題が付けられており、王朝雲を梅に喩え、更に仙女に見立て、彼女が世を去ったことを「もともとは仙女であり、仙界に戻って行った」と詠む。この「玉骨」「氷姿」の語は、梅(王朝雲)が俗物(人間)ではないことを強調した表現である。

さて、作品本文を見てゆくと、まず前半で、梅(王朝雲)は俗物とは違い、仙界の花であるから、南方の瘴気(惠州の悪い環境)に負けず、凛とした品格を備えていることを言う。そして、仙人が遣わした使者の「倒掛子」が梅の木に逆さまに止まっている様を描く。「倒掛子」は南方に生息する珍鳥で、枝に逆さまに止まり、緑の羽をしているという¹⁷⁾。この珍鳥は、「海仙(海上の仙山に住む仙人)」が俗世間にいる梅(王朝雲)の様子を窺うために差し向けた使者である。これに続く後半では、白梅、紅梅を用いて、彼女が化粧など要らないほどの美しさであることを称え、気高いがために、仙女の姿に戻り人間界に見切りをつけ、神仙世界へと帰っていったと言う¹⁸⁾。それはつまり、王朝雲が世を去ったことを、美しく言い換えたものである。

本詞は、冒頭に「玉骨」「氷姿」の言葉を置いているが、これは、先に見た②「洞仙歌」詞、③「虞美人」詞と同様の書き方である。作品の初めに、王朝雲が常人を超えた体躯、美、透明感の持ち主であることを詠い、読者にその魅力を強く印象付ける手法である。③「虞美人」詞では、「氷肌自是生来瘦」という表現で「透明感を漂わせた華奢な女性の姿」を表しているが、本詞では「玉骨那愁瘴霧」「氷姿自有仙風」と言うことで、彼女は「そもそも人間とは違い、瘴気など物ともしない仙女」であることを述べる。両者は共に仙女の特徴を捉え、王朝雲を描いているが、③「虞美人」詞は、惠州に向かう途中で書かれたもので、彼女の深い愛と気丈さを「氷肌自是生来瘦」という表現を用いて際立たせている。それに対して本詞は、彼女の死後に作られたもので、彼女の死を受け入れられず落ち込んだ気持ちを、「玉骨那愁瘴霧」「氷姿自有仙風」という表現を用い、「彼女は仙女であるから死ぬはずがなく、人間界に嫌気がさし、仙界に戻ってしまったのだ」と自分に言い聞かせ、慰めている。つまり、両者は王朝雲を仙女に喩えるのは同じであっても、一方は「華

奢な姿」として描き、他方は「不老不死で高い志を持つ姿」として描き、自分が表現したいことを、『莊子』に書かれた仙女の姿を巧みに使い、詠み分けている。

蘇軾には、更にもう一首、類似の表現を用いた詞がある。

⑤南郷子

氷雪透香肌	氷や雪のような肌は香りを放ち
姑射仙人不似伊	姑射山の仙女も彼女にはかなわない
濯錦江頭新様錦、非宜	濯錦江の畔で新たに織った錦でさえ彼女にはそぐわず
故著尋常淡薄衣	それゆえ普通の淡い色の衣をまとっている

暖日下重幃	暖かい日には簾を下ろし
春睡香凝索起遲	香が濃く焚かれた中で春の眠りは心地よく、起き上がるのも遅い

曼倩風流縁底事、當時	東方朔の風流さはどのようなことか、それは当時
愛被西真喚作兒	好んで西王母に「隣のおじさん」と呼ばせていたこと

本詞の制作時期については、未だ確定されておらず、小稿のテキストである『蘇軾全集校注』は未編年の作品として扱っている¹⁹⁾。しかし、冒頭にわざわざ『莊子』の挿話を踏まえた「氷雪透香肌、姑射仙人不似伊（氷や雪のような肌からは香りを放ち、姑射山の仙女も彼女にはかなわない）」という表現を置き、女性の美しさを描いているのは、先に見た③「虞美人」詞、④「西江月」詞と酷似した手法であり、王朝雲を描いていると考えるのが妥当ではないか。この点は、後ほど改めて論じることとして、まずは詞の内容を見てみよう。

本詞の前半では、冒頭に「彼女の美しさは姑射の山に住む仙人もかなわない」と言う。今まで見た詞は、全て女性を仙女に見立て、その美しさ、気高さを称えていた。一方この⑤「南郷子」詞も「氷雪透香肌」という表現を用いているが、むしろ「仙女以上の魅力の持ち主」という言い方をしている。ただこれ程の女性にも関わらず、彼女が着ているのは、錦の衣ではなく、地味な普段着である。「美女には錦の衣がふさわしい」というのが至って普通の考え方であろうが、なぜか彼女は地味な衣を着ている。その理由を「彩鮮やかな服は似合わない」からであると言う。仙女を超える美しさであれば、人間界の錦の衣などそぐわない。むしろ、着る物など全く関係なく、普段着を着た方がかえって美しさが映える、ということであろうか。もちろんこれを文字通りに受け取ることも出来よう。しかし、別の見方をすれば、当時、彼女は普段着しか持っておらず、それを「錦の衣は似合わないから着ない」と強がって言っているとも取れる。筆者はこのように解釈したいのだが、この点についても、後でまた述べることにする。

これに続く後半は、まず彼女が春の暖かい日、なかなか起きてこないことを言い、最後は「東方朔」と「西王母」が登場する。この「東方朔」と「西王母」については、後漢・班固の『漢武故事』に見える記述を踏まえる。『漢武故事』に、次の記載がある。

有頃，王母至，……上迎拜，延母坐。……留至五更，談語世事。……東方朔於朱鳥牖中窺母，母謂帝曰，此兒好作罪過，疏妄無賴，久被斥退，不得還天。然原心無惡，尋當得還，帝善遇之。

【大意】

しばらくして，西王母がやって来て，……武帝は出迎え拝礼して，王母を席まで招いた。夜明け近くまで留まり，世間話をした。……東方朔が南向きの窓から王母のことを覗き見していたものだから，王母は武帝に「この子は悪事をしばしば行い，思慮に欠けて粗野で，長い間追い出され，天界に帰ることが出来ません。しかし，もとの心は悪くはなく，やがて帰ることが出来るでしょうから，皇帝様，どうか可愛がってあげてください」と言った。

これは，漢の武帝のもとを，仙女の西王母が訪れた時のことを書いたもので，東方朔はもともと仙人であるが，仙界で悪さを繰り返し行ったために放逐され，今は人間界に身を置く「謫仙」であることを言う。蘇軾がここで東方朔を出したのは，自分を東方朔に重ねているからである²⁰⁾。では，なぜ蘇軾は自分を東方朔に見立てたのか。それは，当時の蘇軾が置かれていた状況を自虐的に表現したからではないか。繰り返すが，東方朔は，悪事を行い，思慮に欠けて粗野で，天界から追い出された。これは，朝政を批判し罪に問われ，中央政界から追放されていた蘇軾の姿と重なる。であれば，本詞は流刑地で作られたものであり，更に先に見た③「虞美人」詞，④「西江月」詞と同じく冒頭に『莊子』の仙女の姿が描かれていることからすれば，この仙女は王朝雲を描いていると考えるのが妥当である。目の前に王朝雲がいて，自分は「悪事」を働き地方に身を置かざるを得ない。この状況に当てはなるのは，「惠州流罪」の時以外ない。本稿は，詞の制作時期を考察することを目的とはしていないが，従来，未編年とされていた本詞は，惠州に流されていた時の，王朝雲が亡くなる前の春，紹聖二年（1095年），あるいは三年の春に作られた可能がかなり高いと言える²¹⁾。もしこの推論が正しければ，先に取り上げた「仙女もかなわないほどの魅力の持ち主が地味な普段着を着ている」理由も説明が付く。当時，蘇軾は流人の身であり，生活は当然貧しい。錦の衣を買い与えることなどできず，王朝雲は普段着しか着られない状況にあった。ただ，王朝雲はこのような状況でも健気に「私には錦の衣は似合いません。普段着がふさわしいです」と言ったに違いない。当時，罪を犯した愚かな自分に従い，貧しい中，懸命に尽くしてくれる王朝雲に対して，詞でもって感謝の気持ちを表したのが本作品ではないだろうか。そして，「冰雪透香肌，姑射仙人不似伊（氷や雪のような肌からは香りを放ち，姑射山の仙女も彼女にはかなわない）」というのは，王朝雲に対する最大限の賛辞の言葉と考えられるのである。

四 結びに代えて

以上，蘇軾の『莊子』を踏まえた詞の中から，特に「肌膚若冰雪（肌は冰雪のようだ）」という表現を踏まえ作品を見て来た。そこからは，蘇軾が『莊子』の挿話を使いつつ，そ

の場その場に応じた形で巧みに描き分けている力量の高さが窺える。

各作品を改めて確認していくと、まず①「減字木蘭花」詞では、妓女の喩えに用い、彼女たちの落籍したいという願いを、諧謔な手法・表現を使いつつ、許遵に聞き入れてもらいやすいように詠んでいた。②「洞仙歌」詞においては、七歳の時に会った眉山の老尼僧の言葉を頼りにして、わずかに覚えていた孟昶の作った詞の二句を冒頭に置き、想像を膨らませて蜀の皇帝である孟昶と花蕊夫人とが摩訶池のほとりで夕涼みをする様子を巧みに詠んだ。この詞では『莊子』の仙女の挿話を踏まえた句が冒頭に置かれているが、蘇軾はこの作法が気に入ったようで、後に作られた三首の詞も、全てこの形が取られている。紹聖元年九月、定州から惠州に向かう旅の途中で作られた③「虞美人」詞は、惠州流罪に処せられ、流刑地に行く蘇軾に従う王朝雲の思いを詠む。惠州は所謂「嶺南の地」であり、旅立ちには大の男でも相当な覚悟が必要である。彼女は固い決意で蘇軾に同行したが、この詞で詠まれている仙女は「華奢な体軀」につながる表現として用いられているけれども、作品全体で見ると、むしろ精神的なたくましさ、蘇軾への深い愛を際立たせている。それに対して④「西江月」詞では、王朝雲を梅に喩え、更に仙女に見立て、彼女の死をなかなか受け入れることのできない自分に「彼女はもともと仙女であり、仙界に戻って行ったのであって、南方の瘴気に侵されて死んだわけではない」と言い聞かせている。この詞からは、『莊子』の挿話を使って、愛妾の死を乗り越えようとする蘇軾の姿が見て取れる。最後の⑤「南郷子」詞も王朝雲を詠んだものと考えられ、彼女の魅力を「姑射山の仙女もかなわない」と絶賛する。それは、貧しい中、流罪に処せられるような自分に付いて来てくれる王朝雲への心からの感謝の気持ちである。

繰り返すが、従来、蘇軾の詞に見られる『莊子』については、彼の人生における生き方・姿勢・態度を詠んだ作品が取り上げられてきた。しかし、本稿からは、その他にも、蘇軾が女性の魅力を『莊子』にある挿話を用い、巧みに詞に描いていることが見て取れ、彼の作詞の力量が知れる。あるいは人生観と比較すれば、重みに違いがあるかもしれないが、本稿の考察からは、蘇詞の別の一面が明らかになったのではないかと。今後は、更に『莊子』と蘇軾との関係に関して、より多角的な視点から考察を試みるとともに、小稿で新たに出て来た課題について、取り組んでいくつもりである。

〔注〕

- 1) 蘇軾の詞で『莊子』の思想と関係がある句を抜き出せば以下のとおりである。なお、ここに挙げたものが全てというわけではなく、また各詞には詞牌の後に（ ）で初句を示し、各句には【 】で大意を示した。

「滿庭芳（天豈無情）」詞「浮世事、俱難必【浮世の事は定まり無い】」、
 「永遇楽（明月如霜）」詞「古今如夢、何曾夢覺【昔から今まで世事は全て夢のようで、その夢は一度も覚めたことが無い】」、
 「南郷子（帶酒衝山雨）」詞「夢裏惘然胡蝶、一看輕【夢の中で蝶になり、ひらひらと舞い飛ぶ姿を見た】」、
 「醉蓬萊（笑勞生一夢）」詞「笑勞生一夢【お笑いだ、この一幕の苦勞ばかりの人生は】」、
 「十拍子（白酒新開九醞）」詞「身外儻來都似夢【自身以外の偶々手に入れた物など全て夢のようだ】」、
 「十拍子（白酒新開九醞）」詞「醉裏無何即是郷【酔いの中の虚無の世界こそ我が故郷だ】」、
 「滿庭芳（歸去來

蘇軾の詞と『莊子』

兮) 詞「無何, 何処有【虚無の世界は, いったいどこにあるのだろう】」, 「漁家傲 (臨水縦横回晚艸)」詞「只堪妝点浮生夢【出世など所詮浮世のお飾りだ】」, 「鷓鴣天 (林断山明竹隱牆)」詞「又得浮生一日涼【また浮世の中の清々しい一日を過ごした】」, 「西江月」詞初句「世事一場大夢【世事など一幕の夢にすぎない】」など。

- 2) 詞を扱った論文として, 例えば, 楊瑰瑰「蘇軾対『莊子』的接受研究~以黄州詩詞為中心~」(『江漢論壇』2022年第九期), 張可・王啓才「蘇軾対『莊子』的認識及影響」(『海南熱帯海洋学院学報』2022年第四期), 鄧琳「試論蘇軾詞中的『莊子』思想」(『北方文学』2018年第六期), 李彩映「浅談『莊子』対蘇軾詞的影響」(『北方文学』2016年第十一期), 賈琪「浅論蘇軾詞中的『莊子』典故及意象」(『河北科技学院学報』2016年第三十六卷第五期), 辛欣「論蘇軾詞中的隱逸思想」(『語文教学通訊D刊(學術刊)』2015年第九期) などがある。
- 3) 蘇轍『樂城集』(上海古籍出版社, 1987年) 卷二十二所収「亡兄子瞻端明墓誌銘」参照。
- 4) もちろん, 詞以外, 詩からも蘇軾が『莊子』の思想に影響を受けていたことは窺える。例えば, 倉田淳之助氏は「詩と史學—蘇軾の思想に及ぶ」(『東洋史研究』二十四卷一号, 一九六五年) で, 詩について「彼は『莊子』を読んで, 自分が昔言おうと思っても言えないものをこの書によって得たといったのは著名な話である。彼が最も影響を受けたのは, 老荘の如き思想であって中国民衆の大多数が信仰する俗信の道教ではない」, 「蘇軾の詩の妙味は, 着想の非凡と描写の波瀾に富んでいるにあるが, それが老荘思想に本づくところが多く, 殊に万物の差別は相対的なものたるに過ぎないとする「齊物」の思想に拠るところが多い。時にはその語を引き, 時にはその理を推し端倪すべからずと思わせるのである」と指摘している。
- 5) 本詞の制作時期については, 『蘇軾全集校注』が熙寧七年(1074年)十月とするのに対して, 『蘇軾詞編年校注』(中華書局, 2002年), 『蘇軾年譜』は, 共に元豐七年(1084年)八月の作とする。
- 6) 『捫蝨新話』卷九「蘇東坡木蘭花小詞」の条参照。
- 7) 『漢書』「鄭當時伝」に「鄭當時は, 自分が任侠であることに満足し, …いつも五日に一度の休暇の時は, 必ず馭馬を長安城外の郊外に置き, 賓客を夜から次の日の朝まで接待し続けたが, 常に不十分ではないかと心配した(当時, 以任侠自喜, …每五日洗沐, 常置馭馬長安諸郊, 請謝賓客, 夜以繼日至明旦, 常恐不遍)」とある。
- 8) 杜甫の「寄李十二白二十韻」詩に「筆落驚風雨, 詩成泣鬼神」とある。
- 9) 『蘇軾全集校注』は「ここは鄭容と高瑩が去った後, 潤州の風景は良夜に吹く清らかな風と, 湖に光が満ちる秋の月だけになることを言う。言外に二人の妓女の美しさを絶賛している(此言鄭容, 高瑩去後, 南徐風物就只有良夜清風滿湖秋月了。言外深贊歌女之美好)」という注を付けている(98頁)。この句の意味する内容については筆者の解釈と異なるが, 「良夜清風月滿湖」が鄭容と高瑩が去った後の風景であるとする部分は一致する。
- 10) 蘇軾以前の詞に「瑩骨氷膚」という四字の表現を用いた作品は見いだせない。しかし『莊子』の「肌膚若冰雪」を踏まえたと思われる表現は幾つか見られる。例えば, 歐陽脩の「漁家傲(六月炎蒸何太盛)」詞に「絳綃衣窄氷膚瑩」, 同「玉楼春(艶冶風情天与措)」詞に「清瘦肌膚冰雪妬」, 晏幾道の「蝶恋花(千葉早梅誇百媚)」詞に「月臉氷肌香細膩」, 王安礼の「万年歡(雅出群芳)」詞に「渾疑是姑射氷姿」, 王詵の「落梅花(寿陽粧晚)」詞に「□氷姿仙格」, 杜安世の「更漏子」詞冒頭に「雪肌輕, 花臉薄」, 吳師孟の「蠟梅香(錦里陽和)」詞に「真澹佇, 雪肌清瘦」, 王仲甫の「鷺山溪(掛

蘇軾の詞と『莊子』

冠神武)」詞に「酒傾玉，膾堆雪，綵道神仙侶」などである。もちろん、これらの分析も重要ではあるが、本稿の目的は既に述べたように、蘇軾詞に見られる『莊子』の影響を今までとは異なる視点からアプローチする点にあるため、彼以前の用例の分析、そして蘇詩との比較は、非常に興味深いテーマではあるけれども、機会を改めて考察することとする。

- 11) 上海古籍出版社，2016年。153頁。
- 12) この「自序」には「あの詞を知っている人はいなくなった」と記述されているが、現在、孟昶が作ったといわれている詩が伝わっている。詩題を「避暑摩訶池上（摩訶池の上に避暑す）」といい、「氷肌玉骨清無汗，水殿風來暗香暖。簾開明月獨窺人，欹枕釵橫雲鬢亂。起來瓊戶寂無聲，時見疏星渡河漢。屈指西風幾時來，只恐流年暗中換」というものである。しかし、この作品は『蘇軾全集校注』が、「明らかに後の人が蘇軾の詞に基づき言葉を足した偽作である（顯然係後人就蘇詞加以改動而偽作的）」と指摘するように（422頁）後人の偽物である。
- 13) 「玉骨」という表現は、既に杜甫の「徐卿二子歌」に「秋水為神玉為骨」とある。ただこれは、徐氏の九歳になる子供を「澄んだ秋の水のような心と、玉のような骨」称えたものであり、蘇軾の詞とは全く異なる。
- 14) 『宋代の詞論—張炎『詞源』—』（詞源研究会，2004年）111頁参照。
- 15) この詞について、『蘇軾詞編年校注』は「存疑詞」として扱う（下冊918頁）。
- 16) 「嶺南」は「五嶺」の南を意味する。「五嶺」とは南嶺山脈のことで、越城嶺、都龐嶺、萌渚嶺、騎田嶺、大庾嶺の五つの山脈の複合体を指す。「五嶺」は非常に険しく、長年にわたり天然の障壁として交通の妨げになっていた。その結果、「嶺南」は中原とは異なる経済・文化を営み、北方人は嶺南を「蛮夷の地」と呼んできた。唐代、嶺南出身者で唯一宰相となった張九齡（ちょうきゅうれい／678～740）は大庾嶺の山中に梅関古道を開き、以後、徐々に南北の往来が増え始めた。
- 17) 蘇軾の「再用前嶺」詩に「蓬萊宮中花鳥使，綠衣倒挂扶桑暎（倒挂子は）蓬萊宮からの花鳥の使者で、緑の衣をまとい、枝に逆さまに止まり、東方からやって来る）」とあり、その自注に「嶺南珍禽有倒挂子。綠毛紅喙，如鸚鵡而小，而東海來。非塵埃中物也（嶺南の珍鳥に倒挂子がいる。緑の毛に赤い喙で、オウムに似て小さく、東海から渡来した。俗世の物ではない）」とある（『蘇軾詩集合注』卷三十九）。
- 18) 本詞最後の「高情已逐曉雲空。不與梨花同夢」の二句について、『蘇軾全集校注』は『注坡詞』に「詩話云，王昌齡梅詩曰，落落冥冥路不分，夢中喚作梨花雲。方知公引用此詩」とあることを紹介し、「この二句は、気高い情を持った梅の花は既に夜明けの雲（朝雲を暗示する）に従って飛んで消え去り、二度と梨の花のように私の夢の中に現れない、という意味である（這兩句詞的意思是說高情的梅花已隨着曉雲（暗示朝雲二字）飛散空了，不再像梨花一樣入我夢中來）」と注を付けている（733頁）。それに対して王水照先生は「彼女（梅の花）は梨の花と同じ夢に入るのを潔しとしない。梅の花はひとり咲きひとり散り、梨の花とは時を同じくしないことを指す（她不屑與梨花同入一夢。指梅花獨開獨謝，不與梨花同時）」と説明されている（『蘇軾詩詞選注』〔上海古籍出版社，1990年，164頁〕）。筆者は王水照先生の解釈が正しいと考える。
- 19) 『蘇軾全集校注』は本詞を未編年に分類し、「この詞は、ある日の美しい少女の姿を描き、作者の審美観を詠み込んでいるが、書かれた時間、状況はよく分からない（此詞刻画一天真美麗的少女形象，寄托作者審美情趣，寫作時間和环境不詳）」と注を付けている（767頁）。ちなみに『蘇軾詞編年校注』

蘇軾の詞と『莊子』

は「未編年詞」に入れているが（下冊 831 頁）、『東坡詞編年箋証』（三秦出版社、1998 年）は元祐六年（1092 年）の作とし「おそらく王閏之に贈ったと見なして大きな間違いはないだろう。しかし、具体的な作成日時は考察できず、暫定的にここに編年し、賢察を待つ（蓋贈閏之無甚大謬矣。然具體時日無可考，暫繫於此，以待來哲焉）」と解している（555 頁）。

- 20) 蘇軾が自分を「謫仙」に見立てる表現は、他の詞にも見られる。例えば中秋の名作「水調歌頭」詞前半に「明月幾時有。把酒問青天。不知天上宮闕，今夕是何年。我欲乘風歸去，又恐瓊樓玉宇，高處不勝寒（明るい月はいつから空に架かっているのか。盃を持って天に問いかける。天上の宮殿では今宵が何年に当たるのか。私は風に乗って天上界に帰りたいけれども、天の美しい宮殿は、高く凍えてしなうのではなかと心配である）」とあり、また、「念奴嬌（憑高眺遠）」詞の後半でも「我醉拍手狂歌，舉杯邀月，對影成三客。起舞徘徊風露下，今夕不知何夕。便欲乘風，翻然歸去，何用騎鵬翼。水晶宮裏，一聲吹斷橫笛（私は酔って手を叩き、大声で歌を歌い、杯を挙げて月を迎え、自分の影と向かい合い三人の旅人となる。露を含んだ風の吹く中、立ちあがって舞い、辺りを行き来するが、今宵、天上世界では何月何日の夕べに当たるのか。風に乗って、空を飛び天界に帰って行きたい。帰るのに鵬の翼に乗る必要などない。（月に着いたら）月の水晶宮の中で、横笛をいまにも壊れそうな高い音色で一息吹いてみよう）」とある。
- 21) 筆者は「蘇軾の惠州で作られた詞について」（『風絮』十九号、2022 年）において、王朝雲を詠んだ詞を取り上げて論じた。その際、『蘇軾全集校注』が本詞を未編年に分類していることから、暫時、考察対象にはしていない。本稿でも「惠州に流されていた時の、王朝雲がなくなる前の春、紹聖二年（1095 年）、あるいは紹聖三年の春に作られた可能はかなり高い」という指摘にとどめ、詳しい考証は別の機会に譲ることとする。

〔付記〕 本稿は令和三年度日本大学商学部研究費（個人）の研究成果の一部である。